



瀬觴無底抄
くろね

特別
~12
1077
24





12
1077
2324

初子

太政大臣

廿六歲

春初六各院春御前奉

萬國祝奉

一日子日川小松奉

明石御方年櫓破子頼龍外姫君給奉

法苑教里御方給奉

後西村姫君御方給奉

後明石御方高給奉

利
1077
2324

正月二日六全院臨時各事

後東院御方へ給事

十四日男踏奇事

第六全院より

丁宵私後御事

初子 玉簪 並ノ一

卷石ハハハハ

花鳥

以秋并詞為卷石

年月と相よひるそふ人よきなりそひるの初孫

はるよ 初より多か子日なりなりは 此所也

はるよりきこえははら初とこは初より

はるより初より多か子日なりなりは 此所也

はるより初より多か子日なりなりは 此所也

は春 玉つらの巻

花鳥は春の巻に玉つら

乃事あれし豈の並よれ一と 玉つら

置乃並ふより初ハ初幸卷より八月次
はふくとも月と成りてあるなりとれん豊
の並く玉警の並ハ此卷ハ源氏ホ古儀を月の
事とのせりり 花鳥同むつ此卷の末十二
月ス母さぬさぬくうとてあつて去る正
月也 二条 六条院修りけてううあふ正月
あり

此卷ハ六条院造早少移徒ありし翌年十
二月ニより又クハリトテ年取ノ料ハ各中又ト七

進セラしし翌年ノ正月ノ事ハ新造正月ニ
交メク女卷源氏ホ八月ハ六条院造
早則皮房中ハ後流ニ玉警卷源氏ホ
五ノ十二月ニキ又クハリアリ

此卷源氏ホ中ノ正月ハ

一 六条院事

六条院物ワタリニ中宮ノフル中宮名りニ
四ニ十ニ作ラセ行ニ
式アハ文明年ハ十ハ同シク孫ハ家丹

ニテトイソサセ給

カクテ翌年八月に送畢

春辰巳ノ所ハ南ノ東ニ南源氏堂上トスミ
給

山高ク春ノ花ノ木敷ヲツクミテ池ノ面

白干カキテ前栽メ葉

紅梅友山吹ナトヤウノ春ノ乾シワサト

ハ栽テ秋ノ前栽ツハムラクニセタリ

秋未申ノ所ハ秋好中宮御所ニテヨリ

御座

山ニ紅葉ノ多ユカレキウハ木泉ノ永遠ク

スコレヤリ水ノ音ニ井水メコレハ月ノ光ニキ

岩ヲタテ加ハ瀧ヲトメ秋ノ時トハカニツクタ

ル其比ニアヒテオカリニオキ礼レタリ

夏廿寅所ハ水ノ東ニ東院ニスニ給對所方

苑敷里

涼シケル泉アリテ夏ノヤケニヨレリ近キ前栽

芸竹下風涼シカレヘク木高キ森ノヤウナル

木トモ木深ノ山里メキテ卯花ヤキ子コト
ナクニシワタシ苑被瞿麦々々ひくくを
むノ草くくツ哉テ春秋ノ木草其申ニセ
タリ

西ノ對ハ むら

東ノ町ハ ワケテ馬場ノメト、ツクリ埒ユイ
テ五月ノ卯アソニ終ニテ水ノ邊ニサウフウハ
シケラセテムカニニアルもやシテ世ニキ上
馬トモシト、ノ（タテサセ給一リ）

冬成亥町ハ 水明石ノ御方

地山ウモ便ナキ寂ナシクツシヤ（テ水ツモ
ムキ山ノツキテツアラタメツクル

西ノ町ハ水面ツキワケテ卯々所々（タテノ
垣ニ松ノ木シケク雪ツモテアソフ（キタヨリニ
ヨセタリ冬ノハシメ初霜ムスフ（キ菊ノ籬
ワシハヤおナレ榎原メオク、石モシラス深山木
トモノ木深キナトツウツシウ（タリ

一 衣クハリノ事キ玉ガシ人ノ所カタテニヨク（テニ



メニエツシ給ハヤシ

紫上

红梅ノウキ文 エヒソメノコウチキ

姫君

桜ノホソチカ カイ子り

花教里

アサハ十田ノカイフノ織物 エキカイ子り

玉ノ 夕モソナクアキニ山吹ノ花ノホソチカ

末摘

柳ノツリ物チラチシシレル

明石上

梅ノ折枝。蝶鳥花チカイタニ白小弁衣チキ

アサ子

空蟬

アソニニノ織物クチナニノアサ子



天

うららるるあしとこれと此と

小書 亦六ノ正月翌ノ並ニ祈幸、卷三、月次ニ

書テ約ク

正月一日ニナリ又シハ冬ノ夜ニヒキヤハタルニ元日

立春十九

何 何と云ふ年もらるる事ありと云ふ

まゝらるるのうららるるのこゝ

川号よ及く

うららるる年のうららるる



さし年乃らるるの道のいさよの音気は免れ
あらうとせむく一天春をわしあはれとせ

年うらうらゆるれも大度の眼前の境界へ
これの元日春之げねこころの冬ノ元ノ元ニラハ
雪ケニ用タレ元モ多クアケテハ川大タレ一
天ノ几時を反逆ハ七郊ノ一ニ然ルシノ當時
仁澤世ニ蓋シ黎民格育ノ所徒モあま
移る所ニ洛陽モ夏理ニ時候モ和潤秋ハ
秋の如ク冬ニ冬如ク春ハ春ノ如ク時節ノケテ

メモ分明ニ一天春平ノ春へ

卷ノ何ソノ詞と一ツ、書メリハ卷ハ六字ヲ
カケリ也一とけくハ類うり也一とて云
為家ノ申カシハモ又コノ又詞トテ秋ハ詠
こしキト云ハシトモ定カズノ事と秋ハ海と
雪北多一きよ又由りやて喜乃也一と
うらやば彩ノとタハる一ハ巨類ナリ
うら先達訓のうハ好と深スハヤウス

地 ねる〜ぬ〜るねの〜ら〜た



私云新古今は皆通を難はるる
しきしきいぬ道のくははのく心はのよきせ
りはけきて清く

人をれつらん方はものひつらん

んと湯気ヲ得ニ心モノヒラハル

朱子

のつらと云何んやツクア申れは物ノ

うらうけさよりいしメテ恒は吾同を

久しし事あるは此様ナトノ天地ヲウケテ

ヒタルニまき事の色は自然に人の心モノに

ラハニナシルト云ナレハ天地間万物を心ウレ

ニノタニモ分明ナレ事色ナシハ人ノ心ニウキ

コフルハ理ノ自然ノ道理ナレハ

師説ニは後ヲ三ニ分テ天地人ノニヤトスル

ハトトしむ面白し

あーはれえの事ーさとしハルヨリ天ノ教

るあつらひのうらうらに吾ら此事と云

たトスル地ノ人の清く人ノ心と云

人也

まゝしてゆくまゝとて出づる人の

異小字

六条院へ平生す(アルニシテ年路ハ翠の麓

十ト振ノ物ニテモ川ツク口ニテ見テアル

花云雨してと云河の上此較るるぬりま

新のうりて云ニカケテ人多く今イフ

西の六条院ノアリサと云ニコヨリ一重

空ヲクテニ、書玉セリコヨリ六条院

ノアリサと云ニタムルは六条院ノアリサ

ニ作サテヨリ始メ目モアアナルニシテ正月

十トハ御簾几丁ニ至ニテ花森ナルハケシ

ハと云海よりナルハコキイテと云河と

能アキクニシ教ナラヌ又臣孫タニアノ子キ

春乃克ニ漏レゆるまゝとてと云ハ

六条院ハ十ニテ去色ト更ニ各別ノ

様

花云朗詠早春詩云庭増気色晴砂

緑どり 卓樹たかしゅ暖ぬる迎春いしゅん 江納言えいなくわ

玉たまと一ひと歩ほ一ひと何なに云い玉たま墀を井いよよなな大おほ臣おみ

琢たく印いんよよのの玉たま志しままとと大おほ君きみのみのみ舟ふねここんんとと

ううそそ志しりりせせはは又また百ひゃくををりり一ひとささややとと玉たま志しまま

ままとと 玉一歩の歩禁中小限

御ごろろののありありとと海うみ

六茶院ノ作りサテ四方ニワウクト伝ツケ給

二東ハ惣上南ハ 此未ナシ本

春はる乃のおおととはは何なに中ちゆう人ひと

三三さん信しん二に書しよ命めい凡ぼん々ざつ各かく端たん三さん喜き初しよノの板いた別べつノ

板いたノの云いテて板いたノの云いテて板いたノの云いテて

向むか一ひととと玉たまとと一ひとけけつつとと云い又また喜きははおおととはは

内中^{案上}如此三版二分見一し何^{案上}ノ
御方^ノ行

おと^ノ日中^ノ紀殿 又亭已上何又^{案上}ニ

テ一重版^ノタテタリ^ノ案上^ノアリサマシ

一^ノヤキア^ノハサシ^ノ心^ノタ^ノ教端^ノヨリ^ノ書

出ヨリ^ノコ^ノシ^ノ三^ノ書^ノニ^ノ書^ノタルト^ノ花^ノ鳥^ノニ^ノモ

見タリ

用

教端ニハ先世間ノ様^ノシ^ノ云^ノタ^ノテ、^ノ教^ノナ^ノラ
又^ノ根^ノタ^ノニ^ノト^ノ云^ノク、^ノ次^ノニ^ノ六^ノ条^ノ院^ノノ^ノリ^ノサ^ノシ^ノノ

世間ニ越^ノ越^ノシ^ノタル^ノ春^ノの^ノ光^ノシ^ノマ^ノリ^ノて^ノ也^ノク

志^ノけ^ノり^ノ所^ノ申^ノす^ノ人^ノア^ノと^ノ云^ノタ^ノテ、^ノサ^ノテ^ノハ^ノ六^ノ条^ノ院

ノ^ノ申^ノニ^ノテ^ノモ^ノ案^ノ上^ノ此^ノ所^ノ台^ノハ^ノ又^ノニ^ノ版^ノ各^ノ別

ノ^ノ春^ノ色^ノナ^ノル^ノト^ノ云^ノク、^ノ公^ノ界^ノノ^ノ春^ノタ^ノニ^ノモ^ノル^ノシ

此^ノ六^ノ条^ノ院^ノノ^ノ様^ノ事^ノナ^ノル^ノ有^ノ様^ノハ^ノ別^ノニ^ノ作^ノリ^ノ出

タル^ノヤ^ノウ^ノ之^ノ終^ノル^ノヲ^ノ又^ノ六^ノ条^ノ院^ノノ^ノ日^ノシ^ノ殿^ノノ^ノ申

ニ^ノテ^ノモ^ノ事^ノナ^ノル^ノ有^ノ様^ノヨ^ノリ^ノ始^ノテ^ノ案^ノ上^ノノ^ノ御

方^ノハ^ノ各^ノ別^ノニ^ノ世^ノ間^ノノ^ノキ^ノシ^ノハ^ノナ^ノレ^ノタル^ノ春^ノノ^ノ光

ヤ^ノト^ノ云^ノク

梅はるもみとのうらむらむらひひり吹まうひて
つける佛のほくらめとあむゆ

用

比ハイツツトイハ春ノ穴長岡ノもモラカシ
キ時ふあハイツツトイハ玉ツミカケル六多流
然モコハ常上ノ人カラモ有取モケタヤク

物フアイコソクモレルトモ思込モナリ孰ニナリ
も其ハタクラテイハニモ人間ニモ此曇モナ
し唯マサシク生佛国ニテ也

此用
拾入

上ニイヘル如クニ重ニ阪シタテ名トシ生
佛国ノ詞ヨリ見シハ九品ノ三輩シフクメル
ナレト救るぬ恒移ハト常 まと志ケル

ゆ中人ハ中輩トモ云ヘシ

春のあつて此ゆ中人ハそれこそ上輩トナリ
テ上界上生ナレトシ来ノ詞ニ蓮の中

乃世界よまうこびりけりんおれり
い(元)は返りて相叶はる(元)

用 花云法華經云旃檀香凡悦可畏心

梅の名乃事

用 生佛回ノ事ハ何云四士不二回若方便

実報 寂光也云

用 花云云 生佛回ハ於未浄土云云

用 前の詞よりイカメシク書タルニ對メテ(元)弄

用 如此法據ニ花火奇華たるアタリハ人モ

ヨリ付ニクニ給たる物ナルヲサセテノ殿ノ中

ハキラヒヤカナル物カラ然モ寄來ル人心モ

ツカシスお解ク花和氣ノアハツ云々 惣ノ人ノ

ソハアタリニ有人ハヨリツカシ又松ナルモ若

カラ又事モ有ヌ(元)人ノ本對タル人ハ法

人ノ帰服スル和氣ナクテハト云ナ(元)

ゆきうららけて金すうらに

皇小女

秘妙之

は諸妙之は案上ハ今ハ皇女在ニ西洋カ
ナリク花浴ニテハナクテ肉々モ有(キ)ナク
カウニキラヒヤナリトテ又人ノヨリツク
コシキ根ニハナク位ナシ故也

はかぬんぐも

秘傳ノ令モテ然リハ明石ノ姫君ノ御
方ニトシ

姫君ハ明石ノ姫君之明石ノ上ノ方ニテノ
養育ハ御命ナレトテ案上ノ所子ノ命

ニメ五六年コナタニニノ養育月ヤカレ去程ニ
メシツカフ人トモロカキ人ツエラヒニツル
ナリ 私テノ字ニテヨミナリテ

すまゝおしるひ 此長八郎氏案上ノ方ノ事也

衣裳コトナシニ目ヤスキ也

くくめれいひ

何云 萬回事 見書中曆 六中为一茶

一本煮塢鮓鮓押鮓 火干皆上三置鮓串老
一本鯉鳥麻猪皆随威物串老置上俱
貫之

一本瓜漬茄漬蕪大根

一本屠藕白散空罍坏空盞

一本酒盞空罍坏 四口

一本鏡相具鮓大根檣

元三脚菜齒固奉

内膳自右青瑛门供脚齒固具盛

青瓷

大根一坏 瓜串刺二坏

或说三坏也
七坏在右亦见

押鮓切威置及

煮鮓一坏 四切置及
二串

猪完以雉代之

鹿完以田鳥代之

以上七坏之内精工供奉中一御臺魚類
供御臺或说每席完有版亦 皇女

禊子

三条院女三
御堂用白女

湯明门院乞乞
宮母中妍子

長和三年正月二日 于時

餅鏡御覽是其例也 采花物語云

うらまの文よりわくとみせしそらるる也

多正月ハ三春之氣首之本為政月

秦始皇以正月生因而各改遂故為正

月也尚書曰月正元者首也月土元

日祖祢進酒降神致福祥 尚書大傳

云夏以平旦為朔殷以雞鳴為朔周以

半為朔謂月朝故日朝 此為歲朔也

日家因同時而宗祭之

用 齒固ハ元三ノ日の事之齒ハよりハ之則ヨ

ハヒトモヨメリ齒固ハよりハヒトカタル也

タカツキ本ニツシキフス（テ其臺ニモナ井

大根禰シモル之ハ餅イハ近江ノカキリ

ノモナイツモ用ハシ是ニヨリテヤカテ

ハ固ノ鏡山ノ奇シナアムル也

後頼奇ノくくめれ御ノこの志也

冬につけは

我とのせりりとりらぬたぐみさ
りささるるふかきけりしむる

用 松

齒固のヨハイツカタクスルト之馬ヲ齒ツルテ

ヨハヒシ急事アリ 其理相付ハ者れ

子とせぬけり

海

をいのやれやと誦ノ後ニ白ト云

あ代と松りそ君はいとひはか

あそ松のけよすもんとおらん

とーりられりひあ

元云ヨノ常ハ旧年と年乃内と云内

ノ立春ナト云ル如シコノ年内ハヒヨリ

後一年ノ中ノ事ソコトフキニ在ル旧年ニ

ハアラス今年ノ年中

素然私云伊勢ゆはこむとつて志のた

おつらうのうらよまははつくとと

ら——とおらんハ今年ノウチモ今年中

ツ云は難れ

そり建あつか

ツツシトヨムヘシ

河云々ハフシク戯ク

おとく乃君

源氏の志

エシカラテ源氏ノ仁シヨノ源キ心トリアス
様ナク持ク

やゝこゝろてむささるゝ

礼と致も

源ノサシノツ中始シ作フ人ムツアシナル

こゝろ

弄源氏ノサシノツ中始シ事シ人ムハヒタ
ナク達忠ノ思ハ申ル河ヲカケテ色流ハ
ナリ源ノ仁怒ル存ク

いしあゝうりおろ家

源の因

源ノ今サシノツ中給シ人々達忠ノ振ナ
ツ見知テ初ラカケ給ク初シ加ヘテ
色給むヨシアリコトノ外ナル後ト共

カトト人ノ思ノ名ノ口キカセヨ

見れこと少き世んと

河上トノ申ハ年始ノ祝初之

古事記曰撃口鼓為伎ヒトケ

文選曰極于城之屋壽掩咸湯以取

雋問

西宮託云奇合人オ西殿教調子入花門

列立東庭踏奇周旋三度列立御

前言吹奏祝詞畢

日本紀 言詞 言吹 文選壽

或壽

中将君

源三福後人之次テノウツ口ニ時意上へ
事ハ人之源ノ心カケ治人

カ好クそみゆ家かここと

^用あをむやかみろ山風をてくれん
こりそそんゆふ君らみと後ハ

^用世俗説云 覧餅鏡ニ時御世方々

カ云昔の奇ニモこのそそみゆナト

君乃此字シコソイハヒをうけりつ建

松ノ初ハ何ほこの事ハゆんち申

君カ申始つ家こ

^可は海
此ころくの所んうー治りんとそ

^可糸元 糸賢事

花教里ナトツ始トメアナメコナメアリキ始

けさこのんくれ

玉舞む

園圃ノ事

うらまはれむせめてまろん

但奇ニナリハス

玉カク此物(凡そ見る事)

紫よ(ハ源ノアサタコナタ(所カナキサキニ

御前ニテ糸ラセラレ合々ト也 筆記

物語

源

うら氷とむわる池乃かみ(ハ世リ

くりりたれ氣をさる(ハ世

源の方々紫よと氣ヲナラヘント

何

柳似舞腰池如鏡白氏 氷池如破鏡

雪彩似殘花信達堂 早春

春乃日此けそふ池の如み(ハ

柳 志まゆそまけ(ハみ(ハみ(ハ

き(ハみ(ハみ(ハみ(ハ

夢の地

也紫上

くわい 大紀池乃かみり 前代と
とじつ 夫けとあくるみでん

紫上ノ也奇ノ大紫院ノ新ノ原大。
面白キ事也

大いふこといふも十

弟の地也

深と紫とのサイハヒラ云フ

辛ふハ新の日ちりり

元日子乃日也

十節記曰垂子日登岳遙望四方得陰

陽静気深憂悩之術也又云引小松遊子

初字記云歳首祝折松 枝男七女

二七 本朝事始云天安元年禁中有

曲宴昔者希之中七有此事時謂之子

日遊今日之宴修旧迹者之倚松樹以摩
腰習風霜之難托和菜羹而啜口期
氣味之克調 菅家扈從雲林院序

^於仍末し子曰此松乃多老し少
二年大政大臣

^用文粹才九扈從雲林院不勝感歎耶
叙取觀 菅家

予嘗聞于故老曰上陽子日野遊
厭老其幸如何 菅家

如何倚松樹以摩腰習風霜一難
托和菜羹而啜口期氣味克調

^用類聚國史七十二 子日曲宴

文粹九早春觀賜宴宮人同賦催核庭制衣蓂家
平城天皇大同三年正月戊子曲宴賜五

位已上被庚子曲宴賜侍臣衣被聖主命
小臣分類 石几二旧史之次、見有赤之子日

賜菜羹之宴一野中芼菜世事推
之蕙心炉下和羹俗人属之莫指

きふらとせ此春とひけて

中記

中朗詠子日倚松根摩腰千年之翠海

深推

免つりしき千世のりり此子日りの

ま川をみればと川くうたれ

ふと波もてくまらる松もまらりの

君りりむれてあ代やる今舞

九律抄 元日立喜あ日け三お當乃日な

まはくくそり

まの志もはる

中よりわアユメニヤサエシキル

志つるの五キヌニカラキヌシキルイツシモ

袴シハキルこらりささ知とてさり

下はるのハヒ夕物ヨリ品下レル女へ

おと人此山乃こまのひさあき

貫之集 白河院子日秋序云々
月の時 とうとうまあまて此子の世中
乃事として小松とていひは梅と
うらよびうらよびとて庭とていひはま
る花とちりていひて とうとうあられと
とていひてささおととてまあまあ
あまひあまをける

日融院寛和元年二月十三日戊子卯幸
芸野之幄屋御景

殖小松有和奇 題云於常世院子日松
平益感敏之則秋和奇 序見小野文

右大臣記

今皇御前此山の少松こしら思よと侍

小乃お

明石上之 姫君乃実母

ひけこまひんりこま

可
頼子 籠元 檜破子

うつふの物 籠元ひりりこころとささけり
こりせしり

中
回 結流子 日 伊 幸 檜破子 在 伊 幸 子

押法
亭子 院 位 小 町 子 けり 時 子 小 町 子

正月 ころ 孫 の 日 ころ ころ ころ ころ
衣 宮 の けり ころ ころ ころ ころ ころ ころ
ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ

延喜御製

後 延喜
二葉 ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ

ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ

み 系 此 枝 ころ ころ ころ ころ ころ ころ

銘 中 々

可

於 遠 日 太 衣 小 町 子 宮 内 ころ ころ ころ ころ
ころ けり 時 たい ころ 伊 幸 子 けり けり
けり 伊 幸 子 小 町 子 小 町 子 小 町 子 小 町 子
けり 伊 幸 子 小 町 子 小 町 子 小 町 子 小 町 子
ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ
ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ

かく考此初ゆきそらりののいふ
いふらうたれ同集玄天曆は時ふい
らんふ乃前ふ考此すと紅梅の枝よ
つぎとせうらうらうとみて

一葉抄改

新のふをあらんらうらうらひを
孫々々の枝りり物ふれうと

今風流は友角の心だ

中

ヒケコソツケタル松の枝に雪ノ葉クハル

カタソツクリ物ニセリ明石上ヨリ姫君

ニミイラセタマハコトサラニ思心アリト

イハリ

玉云拾遺奇と思テアケリ 松よ雪の

初子ノ縁ル物ノ思心アラシトハ物ニア

ヒタル作物ナシハ考て心アリテナシタ

ルトく作枝へ

おふ心あらん

新云上ノ義理ノウハ松又雪ニカケテ

見凡一也

松ノ音ハ初子ノ縁ハ凡一ハ勿論ソコニ
含メル心ハ（アルト云義ナレ）其下心ハ
トイハルノ奇 音也也里也

明石上

一 月夜松ノ音ハ凡一ハ
音ハ凡一ハ

可説ハ右ノ河ノ下ニアリ

中柄恒集

春乃春ノ音ハ凡一ハ

明てあれりハ凡一ハ

玉如ノ音ハ凡一ハ

早下ノ音ハ凡一ハ

松玄古ノ音ハ凡一ハ

ノ松ニカレテ今日ノ初音ト云フヤヨト

ニ句ヨリ結句ハ凡一ハ

絶人ノ義ナラハ凡一ハ

テ十ト云義ナレハ凡一ハ

對面ノ音モヤト

年月と約ニカ、ツライテ終スル人ニ折テ
ヒタル初音ヲ十惜ニソト云ク

姫君^{上ノ方}（^{出アリテハ四五}年ニ
ナレク^{対面アリタキ}由クセメテ^{出也}）
初音^{シモ}因タキト^シ方人^{古ノ字ト}経
歴^{此儀ト}兩説ナリ^{経歴ノ義可ナレ}

ととせぬさそれと

可保切

多ふもにも初音さうさうさうさの
善とぬ里いすじひひ

於速

皆此戸^儀さうさうさうさの
松り^善さそれ^喜あ^くさあ

まにあつれと

あといみとえり^結あ

今日^ハ元日^{ナレ}ハ^事忘^レス[（]十日十
シト^更裏^ノ催^ス

しんねん[（]あ[）]あ[）]

黄心よ
あ年
明心雅君

ハタササキ人ノハシメテ文ヤ中奇ヨム事

シイヘリ

直ノ所セリツシ路トク

明くれみそまらるるくた

母此の源此のやり多之

法もえりく

カク川ハナ子テヲ中路ノ行ク

ひきつる道ろいあれさうくいと此

十くろく松此秘伝すき道りや

モトノ根カシハワスレストク

くくくくそあ

可細碎

玉凡ノ奇ノククメクシキハ直シカラ又事

フセシタメニカケル河ナレト

弟の他へ評メ書ク号ト云物ハゴトハリ

評ニテハ叶コシキ

餘情ヲ今子トソハタキトク心ツフ

ケテ見ヘシ

冷標卷ニタ

明石ニテ

三月十六日

誕生ノ時

氏君ハ七メ

い巻ニ係

ホトメ

ウレハ九年

シ歴

也洞乙姫

夏に湯十白わ

花ちりり

と花ちりり

夏ノ音十しん

ワさしこのま〜

ラレスサメスナレ

あはららにららやう

宿あゝいし絵

いせのらららら

可イモセ妹イモセ兄 日本紀 妻妹 万葉

イモセトハ日本紀ノ如クハ伴紫諾伊紫

冊子兄才史婦ト成給一几同縁ノイ

モウト、セウト、云心ノサシハ蘭卷ノ岩ト

分中物玉警君トイリセ山ノうき道

とと毎々千々々々々此橋ノうき道

ふいりりりりり福ハ姉妹トモシラテ

凡二実ニ六妹ニテ有ケルトヨメル

一説ニ六イモトハイモトセト云心之

兄中丈婦事 高津内親王 桓武

沛女嫁滋女御他服昂位廢

又仁德天皇依兔道稚子之遺言彼

一服ノ妹シ女御トシ給

淡海云妹五十重夫人為妻他服

漢朝ニ同姓從不嫁云

玉云ヨル十ト上ラ治事ハ十ケシト年比ノ

如ク丈婦ノ契ハカリハ今モヤハラ又心之

一勅

所本丁了とてむれとすう

解りまひ

熱しそ花敷里ハ心モ千ニ打ムキテ如此

ニ然人々浴此ニ給フミニテ又ハスルニフリ

ノ聲ノヨリ人ノ和ヤ、アケルモ見若

し中物へ

くあさひまにあやひのあがくぬ

中 苑ちりり里二年の内アサ苑田ノアイル
文ノキマツ送リ給へしハツシツキ給へ乞
ヨリトノ西方ニモ皆源氏ノスリ給へルツ
キ給へリ

玉鬘巻ノ末ニ衣クハリノ事アリと延ニ
乞入タリ右ノ苑名ニ詳へ

屋さうまきくさひのあ〜好と

中 髪ノホウシクナキツヤサシ中ト云へ

本シキニテアル(キ事ニテハナケレ九千トヤツ
ニモメツク名に給へカント源ノ思ひ給へ

えい〜

可 日本紀云 伊婁諸子授黒鬘此即
化成蒲^エ苜^{トウ}葛^ラは故ニヤツラツと云ふと
イ(ルへ

中 女ノツクリヤツラツと云ふと云蒲苜
ノツルニ似タル也

とれきりきりんか

浮の心の中は花教里の客教英彦十

几処のナキ物ヲナレトモ我心ノハラス思フヲ

我ナカラウレシク思ル人

心うりさく心ははてしなく

如乳まーふ

伊勢物語 可 ひとふし心うりさく

やせんせうもさうなれんか

詞云男女いさくさうさうさう

いさくさうさうさう

てうさうさうさう

いさくさうさうさう

あまの春にまれんか

ひさかたさうさう

さうさうさうさう

いさくさうさう

人此所句のよのさ

花教里乃所句之何事ニツケテモ恨

所ケシ中モナキトク

ニ由ヤラ

可子細

うー乃所物さうり

年田よりりの所物さうり

西乃多のさうり始まうさうさうさうさうさう

始りぬかすよりか

玉乃乃ノ方

可玉警君 去年十一月ニワタリ始

イマ夕飯ナシトク 去年十一月ヨリス

ニ始程ニイマ夕ウ井くシヤル(キ)

始スニナシ始トク

何志乃ひま久乃始りなれ

山吹よりみと

人々も可なり

山吹よりみと

山吹よりみと

中西ノタイノ姫君ニハクヨリヨクアハル

山吹のりもかるとシククリククリ玉響君ノ

クモシレ姫ナク白ニキエクシクハ山吹ノ

まぬニイト、モテハヤサシ給うけ前ノ

キ治ルハ西世家来トモニケツイタル

ツ見レノ心トサキノ巻ノまぬくうり

まふ百ニイハルハマウノ事ツイハルハ

物ありいよ

田舎ナトニ居給こし事

おろくノマメニテ肥前ニクタル女武任五

ヶ年ノ末年ハカリりるニテオニメニテ

六条院(運)

かゝの十をすうーゆきうてさくううた

可發ノ女シ落スキテサロヤアナル也

玉云發ノアラクトヤリタル極へ

かくて見ゆるまゝ

我物シメモ見タキトへ

えーとすくー句あまーや

おまけ十二字ある此れ 喜多松云
十四字ん

かゞとてふそくみそまらりまれのうへ
移るよるさうさわく

中二コトノ所親ナラヌ事ツイヘリ

玉云源氏ノ隔ナク別テモ行コトノ親ナ

ラ子ハニツナラスモテナシタルへ

又ハ源氏の公ト見エタリ

儀ニアリ源ノ心ト云義モアリナシトモ玉發

ノ心ニ見ヘキ源ノ玉ろツハ馬美此所子

ノ振ニシ源元志を更ノ文ニテハナキ故ニ

隔ナク別テモ行秘ノ親ナラ子ニシラ

ナラスモテナシタルトへ

と一此よ成わら

是より源ノ初之を年ヤラ女此スニ居

浴物ツトく

清くそなくし

今ハ物ツミモシ給ニソ世世トノ方ナトモ

所玉アトトく

とくけおるんりかこせ

うわあそく 明々非君

うーろりこく

業とノトく

ろねん

玉鬘の初

まじあかこく

中世よとアハツケキ公ナキ人

源氏ノの如ニ命ハ又心ノ物派カク人ノ乃初

まじあかこく業とハウシロメタキ心ナトハ

朱書

私云世よとアハツケキ人トの如ハ勿論ハ

古ニ及ハヌ又之何事ニハタニニクモ申サレ

ハキソト去源氏ノヤウニヌトナシヤアニ

口ニテハ知アト見るシヤタク

我物ニモト覺ス湯心ツ世志上ノ知知ク
何トカあらんスラシイカニウシロメタラ
又匠心ツカレヌ(キト云ニヤ

ちんきんことあ

明石上の柳カトシキ一物アルトク
何ししといふし次

硯乃阿乃

かゝれそりまやうまゐのこゝろさう
さうしとら

丁云端ハ縁ノ

丁ニ唐東錦ノ唐ニモ東西ニ京アリ
其内東京ノ錦スクレタリト云

錦明天皇御宇ハ唐東京錦模用吾朝
中唐東京錦茵苳ノ白文ノ白後方一
尺八寸縁白地錦四方二寸洋裏裏
芳平絹ノ縁ノ今葉白地錦一ノ

東京錦ト云へルノ

玉云一劫モ口コシノ東京ノ一尺ニ織タレ
物ノ或云白地ノ錦

后ノ御衣ヲ云シ中ノ処ノ

東京錦トハ白キ唐錦ノ尋常ノ茵
十九(シヨ)
七行花ニ洋ノ

よりあつたよけよ

可案之普通出栢丸

一説薰物ノ火トリノ事也

侍従とくし

物之入之方

可殊之 又云毎之

之入之方

工个香卜云流と有り花ニ洋之

可裏衣香方 零陵香七分 沉香二分

丁子二兩 藜合二兩 簾唐二兩 霍香二兩

麝金一兩 麝香半分

右六種各別拵方教和合唯藜簾唐

从手拵毛碎和且好

一説衣被香 广香 異名之 見延喜式

或衣被香 浥衣香方 千金翼方 沉香

茵苳香 各五分 丁香 甘松香 藿香

青木香 艾納香 葉名凡了為葉ハ
非ノ教也勿ト説

雞舌香 荏腦香 各五分 射香 半兩 白檀香

三兩 零陵香 十兩

又古老ノ尼君ノ秘事トテ申ハ 衣被香ハ

ナ香 半分 沉香 五分 白檀 五分 何モ家

上只ツ取合テ女シナニセシ在耳葛テ合

シト外ニ栴椰子シ女シ粉ヲ入シ冷キ

白ノ垢ニシ霜少分テ加シ碎言ハ女堂 十兩

ナラハ栴椰子 分サトシ惣ノ白ツ下トム

ル板ノ有クシ碎言ハ當時ニ草ト云葉ノ

日類ク

巾衣被香トケルハ衣裳ヲニホス心ニ裏衣

香トカクハ衣ニツク心ニ或抄云ツル昔人ニあ

ま君のツシヘ侍シ衣被香トハラ香 中分 沉香

二分 白檀 五分 已上何モ寂上シ撰テニセシナリ

千歳累汁ニテ合スルニ此外栴椰子ノ

ウハ皮シコソケテ粉ニシ入ハ涼シキ白シ

この中し乃西なりと

姫君よりイキノ西なりと

^的石上
めつーや花の孫くりにつひて若れ
少多すとつふうくひと

可とつる回之 紫明云

とつる用くと尺せり 櫻れ

惟成奇 言れらる孫れとつに中なるり

花の孫くともうこつさうかん

兼威 人志まん約しとつる言れ

初らるるまらるるさうか

中才一白よりつーやト了ハト一に言ハ

心刻おつら 花の孫くる春れ西方

シメト一テ一に之

姫君ノ意上ニ養ハし初ラるる 花の孫

くく 中言乃つらと今日姫君れ西也

奇のふんツまへトツル考の役不アリ
後ト（ニ考ナレ）

息もらりツまへ

可未勅 玉同く

さけるとり

可拾

梅乃花さくら 曇道（一） 歌われハ
らり（一）とあらん考乃（一）

中明名上の姫君乃らら（一）
始（一）侍出たれ（一）らり（一）とあらん考乃（一）
白智ニヤ中流（一）ハ川ヤ（一）たれナリサメ
初ナレ（一）

中并可御遊々ニラレ在ニトモシクモアラ
スト云心シトルク

ひさし

中并可御遊々ニラレ在ニトモシクモアラ
世美フシニ草地ニアララス

筆さう

中

中源氏君ノ明石上ノ御遊々ニラレ在ニトモシクモアラ

事ヲ書ス寸ニ給ハル

わさうり

中

志ろさよけさやみ

中

中明石上ハ白キ浮モン中又ヲ源氏君送

ラシク凡由上巻ニ見タリ

あうり

中正月一日ノ夜ノ事ノ明石ノ御遊々ニ

止ー始（元事）ツイツシカナ花（御方）
く（人）モテ（ハク）キ（ツ）云リ
下ノ（南）の（お）ハ（て）目（オ）シ
凡トアリ（左方）の（紫）上（の）所（方）ニ（エ）ソ
年ノ始（ハ）ト（コ）リ玉（ノ）中（ニ）ハ
今（メ）サ（シ）ク思（フ）人
新（知）え（し）なり（）

人（く）メサ（シ）ク思（フ）
かく（し）も（あ）る（ま）り（ま）

明（存）上（ノ）心（シ）ア（ナ）キ（ニ）如（依）ニ（私）信（ク）也
攻（ナ）ク（ト）モ（ト）ヨク（ボ）リ思（括）

ま（ら）ら（ら）（（分）ら（ら）る（由）け（や））

可（ケ）好（ケ）物（モ） 白（文）集（十）二 在（者） 日（正）六 け（や）を

心（ス）ク（シ）ナ（ア）ク（モ）ホ（ケ）ク（ト）シ（タル）姿（ニ）ア
ラ（又）也

選（制）園（中）子（中）を（物） 季（白）侍（差）席
世（間）を（物）不（在）天（ニ）モ 能（サ）湯（君）心（刻）

小書

松江次才目録ハカリニ名目シノニ載テ
以才シハノセス不審

可憐時客トハ拾改園白ノ亭ニ春ノ
ハシメ上達ヲシテ招テ遊シ云々

定シル公務ナラ子ハ時客ト号ス凡自
余ヲハ大宴ト云中宮中宮并左大臣之批

政長朱器ノ宴ノ設シ時客ト云一リ余ノ
撰悉宴ヲ大宴ト云之是モ源氏批政

ノ在ニ朱器ノ宴ヲ設ラシタル故ニ時
時客ト云々

大宴事ノ正月二日二宮大宴中園白源

時客四日 左大臣宴五日右大臣

宴 渭母屋宴 大臣初任渭廂

宴

中河海説アヤシリ大宴ハ毎子正月

二三云各コシテ給フ其時ハ諸客ノ使

十トアリテ客人ヲ延テ招テテ氏ノ

一ノ大臣ハ氏長者タルニヨリ朱器臺

盤シ、氏院ヨリワタメ是シ用イレル也
自余大臣ハ赤木ク口木ノツク工極ノ
器シ用ク者アリ鷹飼ナトワタル
系アリ臨時客ト云ハ正月二日三日ノ間
閑白大臣ノ亭へ客人ノフト来レル云
ナテ臨時客トハナツクハ其時ハ臺盤
ナトハ用ヒヌメシキ高ツキニスルハ催子
樂朗詠ナク又キナトアリ樂器ヲ
メサス笏拍子ニテウタフ物ハ源氏君
左大臣トナルニヨテ臨時客ノ事括收

臣ノ如シ

^子松年中行事抄云 正月二日閑白家

臨時客事

花鳥ト根元抄トお造花鳥ノ時ニル
改ラレル

根元抄云括收閑白家ニ春ノ始大臣以下
ノ上達アソ招川メ遊事ノ定ル云括
ナラ子ハ臨時客ト云ニマシ大臣母屋

ノ大卿食年シテ行ハ鷹鳥飼トワタリ
テ其奥アル事乞ハ苅氏長者朱忌ノ
響シ綴ルハ大臣家ニ板器ノ食シソナ
フルハ臨時ニモ者ナトアリテ尋常ノ
大響ノ儀式ニ同シハテツアタニ御遊アリ
テ催馬ホシ款リ

玉云客キマクト云ハ一劫臨時客ハ攝
園家ニテノ名目ハ但六条院ハ右臣ナカ
ラ執政ノ職シモ兼タル程ナレハナステ
イハルハ一劫

おとく

中おとく守ハ臨時客ノ取乱シ事
ヨセテ禁上ニ正タイニ向ヒ終父ヲ云
ち給ハ

中ノ祝テハおとく守ハ禁上ノ嬭款
シニキラヤシ給

ろくろし

源時客ニハ禄ナトハナキヲ是ニ事ニ
事ツソニタル人

るすしひるふし

源ニ似タル人ニナキ

しつそくおひく

中ニ詳

可右族 花族心人

ハハハ有職トモヤケリ物ヲ知る

くトリハナテテハ何シモ皆スクシテ見エ給

ト源氏君ニ立ナラシメハケヲサシテ百

ツヨシカタキ由之

ハハハハハカタキヨリハシメ能能ニイタ

ルニテノ事ツイヘリ

ヨク

茶子地

ころ流(まじり)

源乃流号ノ事故家衰葉ノ事

ふし如北へ（ルハ）生ゆ六条院ト云
小書 奥へては院へ系ルト瑞奇乃のり
朱小云 松之首乃事ヲ後人云ス書止院ト
云云歎れ

つねのうらとりのとあはるう

今源乃玉誓と云ゆてイカサレ舞
十ト思葉時節止しん

花乃香さそふ夕風

可哀 花のうは風乃ゆかりにさくを
言はるふ志多入りん風

佳境 山崎此花のうさそふるに
去乃子々をほつらうらる

常るらん梅うととてさつさと花とい
ひてとさうてまう梅と云妙止語
古今乃花のうと風のゆらりにはさ
こよと梅瓜つてん

素然和三光ノ節云々今乃本方此心
梅香もど風りも久てうくひもさ
ささふしあんとすう

此詞の去乃初風此を同うりし聖人
の梅乃さびあひもたは昔風乃花
とささひりやうやうては妙も
香もりふ風と心法用切つる妙
とそ中きり

お中人の梅やうくむてささ

中源時客の肩又キの事あり

花と心アリテ紐トクトイ(リ

あまいふれとささるり

丁々ツカシ時

物の志へとも

中此殿 催馬糸

中源時客の樂器と用を鄂曲人
笛拍子とてうりては

時客の大答乃例よるすくして第此
第うしつてりし出りつてりや物乃
志く入つてりつてりし物乃
とほも曲りつてりし時乃調子とも
立るし 樂器乃をとりしつてり
るしつてり む云花乃

弁の少おのの飯うりつてり

小書 青表紙は名士

私云は弁おの今ノ中ニ書くり

可 秋は深安人氏京人又不見死中弁近

求少の延暦廿三年正月廿七日任参

議 中弁少の如え

け殿 催馬系 品 この飯はじつと

中りうはくされあはれはくさくさ此

花 二版 うはくされあはれはくさくさ

此るりに飯はくさりや殿はくさ

よりや

何と云ふものと思つる

可^レら此^レを^レに^レ考^レ致^レに^レれ^レ後漢書、^レ朱草

福草ナト書テヨメル^レ延^レ在^レ武^レニ^レ福草

又^レ杖^種ト^レカケリ^レ風^レ女^レ記^ニハ^レ蕙草ト^レセ^レ之^レ

曾^レ祿^レ好^レ忠^レ集^ニコ^レス^レコ^レ草^トと^レワ^レク^レヨ^レフ^レト

ヨメリ^レ然^レシ^レハ^レ春^ノ始^ニ萌^レ止^レハ^レ草^レ此^ニ三^レ葉^四葉

ト^レア^レル^ニツ^キテ^レ木^トモ^イ一^リハ^レ草^春初^ニ

必^ニ三^レ葉^ニ萌^レト^レ又^レ椿^トモ^イ一^リ

日本^レ紀^ニ少^レ彦^名命^椿木^ノ夕^子ツ

一^キテ^レ家^ツ作^ラス^ト之^又三^枝条^トテ

アリ^オレ^トモ^ユシ^ニ三^枝ノ^花ツ^折テ^酒

樽^ツヤ^ワル^ト合^ノ文^ニモ^アシ^ハ各^別ノ

事^レハ^レ但^ラス^レコ^レ此^ニ三^葉ト^ツケ^ン

夕^メハ^今ノ^三枝^ノ字^モ心^ヤヨ^フハ

キ^ハ葛^{サキクサ}

宗神天皇内侍所同殿シオソシ申サ
シテ温明殿シ七回ニ作りテ山家申サシ
シ事ヲ三葉四葉ニ殿ツクリセリト云ル
也ナシハ三葉四葉ハ合テ七回ノ字ヲ成
トヨムク三回曰ク或後ニハ三段四段
ク後ツアミテ重テを數シ多クツクリ
重タル心ク是秘説也ト云リ

おんこころきりり

源の何れも事々りり此のまゝつりて
たやうれて各別よおろし也

物有るごとくさうは

紫上乃外ハ皆よきに因如之

くらんじ此中乃せりよまうさむけ
片らんて地也

可於蓮華中經十二大劫觀經下品下生
天云難得生彼華合經於多劫此亦
罪人在華内時有三障乃至除已已
外更無諸苦經云猶如丘又三禪

樂也觀經疏散善義云リ在萃
内時有三種障一者不得見佛及諸
聖衆二者不得聽聞正法三者不得
歷事供養除此已外更無諸苦

中上ノ初ト春ノ正方ツハソケル此此ルカ
心イ（リ）其外ノ正方ツハ物（タ）テ、
因法名ニ蓮ノ花ノイハタメ用ケ又ニ又ト（
タル）十樂ノ中ニ蓮華未用ホノ心（
王云皮蓮ノ中ニ切ツ絶ル同三ノ不足アル

ノミ之佛ツ見ス說法ツキカス佛ツ供養
セス（ト）東ノ院ナトニアル人（ト）サ（ト）似
タリ

紫トシハ生佛同ニカケリ其館ノ所
方ツハ下品下生トカク之（ト）故ノ中ニ有
テカラ如クヨクニ因法ハ皮蓮ノ中ニ切ツ
テ凡三不足アルカ如ク三不足トハ一ニハ不
見佛二ニハ說法ツキカス三ニハ佛ツ供
養セスト（ト）

東院ニアル人といふ類

まうしてむんくう院よるあれ

末摘 空蟬ナト云云に書く

中ニ茶院ノ末院ニ末摘元蟬ナト

スミ治ナリ

世乃うまあみくぬ山らに

可世のうはあみくぬ山らつるん

おろふんくそわうううけ

私云蓬生巻に太武のお方行なり

うらね世のうさけみくぬ山らに

舞すれナトヤセコナリ

つまみ人此

源氏

おとまひめく人

中うけをらの君れゆ

うみ乃うらけれん

末摘花の書

さうりま日こらつて

ちと^{小言}かつめてさあひまふ

臨時客入り日叙位七日節會八日大

極殿は舞會 或は幸十日陰日

如此おノワハヤシ中日比るはスト云々

ひまらり乃富の御さへ

末摘^{小言}さあみくくのんくゆい思念サス人

目ヨクアツカヒシモシ始末

人めれりさうり

末摘^{小言}ハ人カラナシハ人目めりさうりサシ亭

ニシ始末

あつりともくくーあつりさへ

松^{小言}云蓬生草ニは乳母ノ侍後ヲ始ノ

大武ノ水音伴テ筑紫へ下向ノ時我

はくーのヌチタリケルヲうー

始つらう久天アサリハカリニニイトキヨ

ラ花ノんこよふてトよメイヨ末摘ハ

髪ノヨキ人ナルカ是サへ年ヨリサモ

ナキ也

所よりかゝる年ころよかゝる(ゆゑは)して
て勝のよとく

不五分二あるは川の流る水と年はより

動五分よきしるはるるさすりや

日

勝津流の中よとよとありてを

うしつれはひの例はしるは

中五分右今ノ流ハ勝シ髪ニタトヘタリ是ヨ

リニ髪と又流ニタトヘテ勝のヨトミ

とハシラヤノ更リタレ

中五分奇ノ如ハハ勝ハ年者タレ一ス子モ

思ス子ナシトイヘルヲ髪シ流ニタトヘ

ヤヘタリ

玉五分云髪ノ白クニシリタレヲイヘリ

右今奇ハ勝ノ水トノカミト云字ヲ以テ

髪ニタトヘテ思キス子ナシト云シ是ハ髪

シ流ニタトヘヤフル

朱小書

新五分云ヨトミト云テ思キス子ナシカニシレ

ヲ知ヘシ

まわにもしひ

源乃かろしり正神ニモえひひはらふ
末橋のま心し十中

柳いけふしそすさまりしりまれ

丁玉巻巻ニ末橋ノモト(柳ノツリ物シ
送ラシタリ人カラニ思ヨリヘテセラシタ
ル事ナシハケニコソト云ク

前ノ衣クハリノ時はは方ニハ柳色ヲ
こイラセ給シ事ク

小書

柳色ヲ見タムナキ色ニテハナケレトモキ
ナシ給人カラク

むらと形くらあさかひ移りれさひくく
可捨練ハ紅ニ裏法タルク

中ノハ移りハウスキ紅ノハリタキ又ニ強
敷イタシハ志ム物ク

さしくくくハサくトナレ
ツこも色ナレク

はらとり物乃うらま

巾ハ織物ノウラミキト末揃此方ニ用ニ
ラミハ海ノ何色トモ見エヌか付
あ

かきつらら

うらみよさるる

巾ハけうらきハかきねのナキツイアリ例
ノウラミキトモ見エヌか付
源氏ノ送り流る小襦ハ柳花ハ
次ニ黒キカイヤ子リ一カサ子ハ五ミぬノ

分ハき物物此ウラミキト表着ナト
ノ事ハミナハのる流ハ単ツカサ子
ムツイハニヤ
玉ハうらきハ赤タヒミぬハヒトミ物ハ
ミぬノトニ必ミウカカミぬハミミナト
あまうミウカカミ

御ハあはれ

源ハ乃

小書
アラセウミノ人ヤト

しうしうに西木丁ひさしけくろひをそそくま
中流らる里の流成に對面の時木丁の浦
タレヲ流成ノ方ヨリ押のけをふひそ
是もさえておくるや上に見タリ末橋ハ
木丁ツクまゝのきくきくはよとりて
鼻此方アラハナルハ流成君コトサラニ
木丁ツク浦ヲ流成ハルツク申く女ハサレ
モ心始ハ又トイハレ之目そこモテナレノ
心アレト心ナキト人トノ上ニワカレタル物

ナルシ

ナラ

い海いかくあわれり

兎ニモ角ニモ源ツクもれも始ナレカ

アハシナルトシ

かか

小言

クもあしも流カサテハク、ミント受ス
ニ移りし物一歳ハ源タニ見ステハ流
アノ人カハク、ミントモホス

松云かろくことハ鼻ナト又ヨロツ衣裳
如キノ一ナルこと一なるものあり
とよハ凡ヨカラスト七世上ノ人シユニセア
ラ又ツ云ル

わきまにいとわらふ

源の仁怒アル也

所そととて

源の同終也

あつとるもつとそと

中只内ノ姿ハさう物ノサマメカヌカヨキ

ツ云く

小書 松イカニモホジマノトシタルカヨキ也

ころくくくはすうにうらまひ

サカタの巻ニセアリ五音ノ通シタルハコ

とくくくト云納也

ふいぶのりざり此君

醍醐の所因聖君也

末摘ノ見

かえさぬとさうとさう

中つらと此カハ中又ツキ始みと醍醐
ノ阿闍梨ノトシルト流行と

小書

シタギノヤウナル物モトラシ流行と
松籠装と云流行り末摘巻と見タリ

其時ハ源氏十七歳と

は巻二ノハサケ年ニ及フ事之タトヒ

醍醐ノ阿闍梨ノトシストモアセリ年

久ト云マシテ可笑ク

いと云ふあつと此中と云ふり

中醍醐ノ阿闍梨ハ末摘巻ノ所也

ト云心之阿闍梨ハ末摘才也

先ハ似合タレ是才ヤト源乃心流之

心ウヅクと云ひまう阿闍梨と云ふ

ゆりしおむせとあにいていとゆめり

さすく乃人ト云ひ

可まめハ真 木強人

さすくハ 木強人

中つらと云ふトハ末摘ノ事人心事

有の事しに云ツ心ウツクシト云ハサレト
モ因ノ君より物をその事と抄サスの
治ハサツけとてうごれよ居て源氏
も末裔の所ニニ減ニキスクノ人ニ
成ニヤサク馳又干治ハ又心ニ木スクハ
本男十ト云中始シ

うゝまぬいしよ

源の詞

山々一ろとれ一ろ衣あつり治して何

るん

山^{可送}々一ものゆ一もひくして公に

い海いと縁りれ縁やとゆうき

世^{可送}のれれて世心よ一ろ衣あつり

世^{可送}々一とて

世^{可送}の一ろ衣の裏の代に用らる

もる雪りまゆ一ろ衣あつり

喜ぶにきりとおろろれわら

山依は草葉の露とまけらん

このころ衣をぬきまきま

叶かきぬいとしよーと阿因智と

浴つるいとしよに事く

山依阿因智と云

あつねんとくちあんとくち

玉云 一語云 何んといふありたんと云

初んとい 秘不實

^用何んとい相当せんといふ

とりた兒白く人の衣

とりたあさか 頬モナキト

ひなけらる白敷衣をよりの

みと袂の杜りうらやまひん

サソりたりたはるの措チラス内心

こせテ著ぬ

あつねんとくちあんとくち

あつねんとくちあんとくち

可後撰アニタ

さふらうらひちり少とありける

私云拾遺才六別ノ部ノ文字お遠

あまら少下しと詞去六橋云頼卿

如てらうらま時うらうら継母也

侍ノ十けのじまのくまじき一は

あうらうらうらうらうらうらうら

おまきくくくくくくくくくくく

中何れくくくくく物ニ退屈スル心ツヤ

又人ニシタカフ心ニマ小蝶ノ巻ニモけ詞

あゆみ 中一回

おまきくくくくくくくくくく

用 及びさ公の

下随窳 史記 玉篇云徒果天 爲人懈

窳 命維又 器室中 後

まうてかさくくくくくくくく

よのつらるんとのゆえ

中よのつらるんとのゆえ

自今よりまもるる

じひの院とらうりけさせ

丁長倉 日本紀

中じひの院ハ二条院ハ

玉云二条院ノ義ハ

二条院ハ東ノ院ヨリ向ヒトイヘリ

すこし白々下のけいひ

中治氏君の住居のむす

源
うさぎのまは本と云うるものこそ

よのつねまぬらねん

中こ乃つ孫まぬらねん

キ鼻ノ色ヲヨソヘテよみ

わが里の細く住居のむす

こト白の帝陸君ノ心アリ

うけせまはあま衣あも

コ、カテ又空蟬のうさぎ

中下ニ松の浦瀧の川寄タリ

衣まのそタリカレハ又送リ

タニモカ、レル

小書
うじやし事

父中納言ウセテ後侍ふ介の妻にたり
又常陸に成テ下リし時具メ下リ
園屋に改京同卷に介ニツクシテ後ニ
厄ニ成テ二条院ノ東院ニ住キ

うをさうりさゆさ後にはりん

小書
我ハトハ心ハ又用意ハ懸念ニ我コソトモ
ナリ居スミノ極ク

佛さうりさうり不えさせ

心アル事ハあのみはく

あをさうり本下此ゆん

女房ノ花ノ帽子ノ多ク

中出家此人の本下此帷ハ喜純ヲ用
ル之空輝ノ方ヘツハラシシ衣モ喜ニヒツ
ウ(ニヤサ子タシハ本下ノ色ト目極ク

神くらりさうりそ

中神くらりさうりさあはるとりさうり
のゆきゆきさうりさあはるとりさ

世の文に好むるは

さぬくしりの時我はさうのどろ
秘してあり

松可法うらとふりよおひてそ

とくにきく松うらとふりよおひてそ

じつとふあふりよおひてそ

小書後撰雜一西院ノ女正子淳和名源氏

皇女はくしりよおひてそ

當時かの院此中松ノ松ツケツリテヤキ

付ゆきよ性川方とくに安松

川新とくに因松

昔よりゆきよ性

源乃初

さすうにかつり乃

小書ツイニ源ニハシクアハテ果タレ人ノヤ兵我

延一東テ居ん程ノ契ハ有ケルヨト

かゝるくさ

。月輝の初

あきらむるは

源氏流の心こころをせすと

つよよるうくかきかてんまううーあひー
そのじくひるし佛よりこころ

中乞ハ源氏の初め佛よりこころ
罪と懺悔するは源氏れううー
の罪障と修りかこころて

源の初め中川の宿より出来ると
心成はくーまひー事と今の朽

ハ佛の懺悔ーまてそめと又
さひーふ事とあひと

おのり志るや

おのり、ふやふかひ事とそめと
事なれくさひ知りふん

ソナタハ思に知したるは其後ニツナリテハ
ハニ又事とあひつとろりそめとの路
ハ紀伊守の絶ふく空蟬ー心カケ
タルソシる危ニナレシ源ノ知テの

あはれ

わがこころあはれなりとてわがこころ

中源氏ノ心ニハヨリツ子ナラハ継子乃純
傳子ナトシコソムカノ心ニハヨリツ子
おひらけぬナラハナラハナラハナラハ
ナラハナラハナラハナラハナラハ
の終り

かろあさほし

傳子ナラハナラハナラハナラハナラハ
事ハ源氏ノ心ニハヨリツ子ナラハ
しと純傳子ニハヨリツ子ナラハ
こころ心とれぬひらけなりや
傳子ナラハナラハナラハナラハナラハ
多しなり事と申の如くわがこころ
伝子ノ心ニハヨリツ子ナラハ
わがこころ心ニハヨリツ子ナラハ
たろし

用

宣原の心申すこころ此純傳子ナラハ

くこひひ一ねこほよめゆと原れ
まうしりてそのゆふしうめく
かゝるけりまゆとほえしそそつとよ
こがりのじしめ

素好因去る情の現かやうは力との
くそくとくよらんありやのじしめらら
まゝゝあんなん

いあしよりよめうく

元輝のうらあゝあゝあゝ

りそらあれいりま

空輝出家のんま

くままるのゆかろくまゆ

んれあつたもよまゆしよりてを

しししししししししししししししし

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

かゝるりのいひいひあゝあゝあゝあゝ
るやうま

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

おもゆるぬ物とらるぬて

言修君はホトノ用意もアしヤト

おのぬけよおられらん

け外ニモ多キ

これうのそま入らう

つまぬとすぬぬさ

きりひきりあつみられぬぬぬ

ろめらけ建命らんぬ

可信明集

あつぬ命と志ぬぬ

あつぬ命と志ぬぬ

教本のみの

あつぬ命と志ぬぬ

あつぬ命と志ぬぬ

あつぬ命と志ぬぬ

あつぬ命と志ぬぬ

あつぬ命と志ぬぬ

あつぬ命と志ぬぬ

あつぬ命と志ぬぬ

あつぬ命と志ぬぬ

今...
...
...
...
...

朱...
...
...
...
...

天元六年
踏奇...
...
...

踏款盤觸...
田融院

天元六年正月...
踏奇太

政大臣...
兼...
...

大臣...
...
...

家云...
...
...

壺持...
...
...

首有...
...
...

無之

天武三年...
聖武...
...

四姑有男...
天平十四年...
...

童女...
盤觸

新儀式云...
正月十四日...
...

西宮...
延喜十三年...
...

尚侍...
一親王...
...

朱首之
聊誤
アリト云

中

太后所記云延喜七年正月十四日おとこ
多しありてこころをの苑ノ一人
大いしありありし正月十四日男
踏歌く喜儀新儀式以下に見たり
丁酉答云大史云私勅七日宴 持統天皇七年正月丁酉漢人踏方ヲ々
テニツル是新年ノ祝初ク
首中云持統七年春正月辛卯朔丙午
是日漢人奉踏歌私勅十六日之
八年正月朔日し酉漢人奉踏歌是卯唐

人奉踏歌

歌以下相列之且華門ヨリ入テ右近
陣ノ前庭ニ列立天皇出御 清凉殿ノ
孫廂ニ御侍子ヲ立テ御座トス内苑寮
祿ノ綿ツツミタレ机ツヤキテ殿前庭ニタ
ツ云卿 古ニヨリテ東ノ簀子ニ着坐御厨
子一取酒肴ヲ供ス踏歌ノ人ヤ名クスミテ
南殿ノ西柱ヨリ調子ヲ奏メ 仙苑門ヨリ
入テ東庭ニ列立周旋ニ度ノ後言吹

此節ニス、ミテ祝詞ヲ奏シテ方曲ヲ奏スル
人ハ東南ノ階ヨリノカレ内侍二人相分
テ綿シテ踏奇ノ人ニクワク其後巡
ルル踏奇曉ニ及テ帰来奇从年人ホ
庭ノ庭中ニ儲ラレテ各禄ヲ給テ退出
用
中正月十六日ノ節會ツハ女踏歌ト云年妓
ス、ミ出ル故ノ男踏奇ハ十四日ニアリ殿
上地下ノ位从下ノ輩然レキ所ニシメ
クリテ催馬ホシノウタヒ年カナラキ事ア

朱小書云
京中遊
士ノ女踏
奇ノ事ハ
誤ルル

リ是ハ昔正月十四五日ニ京中ノ遊士月
ニ采メアナタコナタツメククリテウタヒ年
シヨリ事ルコシリ末ハ千秋一カ歳ト
云テ逸真ノモヨホス事アルハ是ホノ
奈風ノ田融院ノ天元六年正月男踏
奇アリシ其後ハ記録ナトニモ不見ナシ其
儀式ハ西宮ト云書ニ見タリ

新儀式 西宮抄ニアリ 日本紀持統天皇
河海ノ川ヤウ御誤アリ 隔年ニアル事

ナシ、今年ハ男踏奇ト云

私西云云

古語云、知ん是禰門

作之

踏歌後日勅宣令譜安良礼末之利

可抄云ウチノシ

歩スミ賀汁ミヤ儀持頭着位袍當夜歌从

已下相平麴塵袍集中院暫而自

月花門系入行列在近陣前庭時出

御々座臨廂而四同平文御倚子

内苑寮昇祿綿札立前庭南才四

間王以依召系上簀子南才三弓差日坐人多及南庭小板委

賜酒者於王以御厨子取供御酒踏奇

人進南殿西从始奏調子訖入仙花門

列立庭上踏奇周旋三反後列立御前

言吹進出當綿案立奏祝詞喫囊

持三声囊持梅唯而計綿敷奏綿

鴨曲次奏此殿祝著座列立門掃

了寮当御階南边一絲丈立床子為

款从以下案人以上座相對地為上仁
壽殿西階南立床子為管絃座南廊
小板敷東之上交置立札為打鬪斗
持囊持座又有一取司二分吹管者同
着之內壁下北面西上為殿上侍臣
座內花桌四尺臺盤三基立案人以
上座八尺臺盤一基為管絃之座并
備肴膳次王心以下殿勸盃侍臣
取雜色以下行酒三四巡後漸調子

唱竹川即起坐列立三四唱後案人

已上双舞進申上東階內侍二人相分

被綿且舞且還

女卷之二為綿
連作內侍後

但彈琴

者以下男藏人二人傳瓦御簾中

於庭中被之奏我家曲退出自小廊

戶其後踏奇所之及曉歸系御座

如初奇以舞人賜座於庭中相對西

上管絃者在撥切北上西面并鬪斗

囊持坐在南

西上北面打鬪斗座

出御後

王心先作黃子奇以下依召魯入著
座賜酒饌此間奏後旋救巡之後賜
祿有羗幸退出奇以下子深襪各一領
奇掌踏掌同色衾一條吹物渾物襖子
一領布熨斗囊持綃一足內羗寮立
高机積綿百屯

延喜十三年正月十四日丁巳御記曰此
夜有踏奇事晚及風雪及戌刻雪
晴亥一刻踏奇人未魯入於右近陣

前理管絃此時即意子中務卿親
王常陸太子親王大綱言藤原朝臣
權中納言友原朝臣魯儀仲平
朝臣定方朝臣市侍黃子友兼人
亦進到竹架東以列立先奏調子
次乃春乐漸進南小惣七度說當以
前分立言吹壯調持囊荷綿一即
奏緋鴻曲次奏以殿此間內羗寮
立臺盤食竹束編掃部施床

子奏款——行者床子親王公心未下殿
行酒三四巡後爰法文潤款行何曲使
地列庭中內侍苑人未持被綿給階
坐款从已下舞童以上及舞進上階
給綿綿琴已下未合也
令男苑人付後給了款我家曲

退出時子一刻自澁口到東宮息
取曹子踏舞江徽夜次尚侍曹子
苑香舍次兼香殿息取曹司羅景
殿次克明親王直序昭陽舍次彙

入未宮寅四刻還彙入田裏水右道

陣前右之東庭掃鋪坐給酒看令奏

法哥三曲後給祿哥以給禱舞

人給禱台人苑人取人未給禱子雅

禾物師未給足絹已上即入內方舞人

未退出于時卯三刻

同十七年亦三年同之七年

李口王託延長七年踏哥人裝出綿

冠趨寧兩腋袍白下靴裝着深沓

持白杖以著立加列前官抱腕劍振靴
高巾子著綿面童子二人在舞人
別本意特兒令何子
不與女子舊蒲町其壯衣束如窠人著
花加支繫房及著絲鞋凡女將行杖
進中間綿臺束供一唱囊持二色
清以稱唯列綿處唱一十百于萬
億木數小退詞吹凡於中將伊衛凡
奇以右於中為案於右奇以出小戶
衆中宮以徽及次苑香舍王云府
南緣

次養香殿右大夏
女御次東宮踏之番御

前凡右大臣有障共不衆若所故不
踏又云内侍二人相合被綿且舞

且邏女
持綿
總人
内侍後但彈琴者在下男

總人二人倚瓦湯簾中於上庭中
被之奏我家曲退出

西宮抄云
一踏款事 私勤

八日被定踏奇之夏台内藏寮官人
作自明日可多備踏款調乐所酒

看并可奉牀綿丈牀細屯一連祿新
綿十連綿ノ苑新綿二屯糸三兩之
由召掃了寮作可奉床子鋪設之
由召主殿寮作可奉燎火之由召九
右束門府作可掃中院并含章堂之由
洞平ノ事晴日月中院
西進行含章堂ノ兼作之召大苑首木工
寮官人木作來十四日可打七尺墀
於中院之由召穀倉院預作可設同日
中院去立廻食之由召修理職ノ内作

令作進款及以下
假女搦作之
年人以上之杖
洞示
之同

又召大臣大將并女御木家司作可
各備朱十四日踏奇之廻食之由酒飯
被綿ススニ隨取有列又召御巾子造作
可奉了巾子二口又召内苑寮作可
奉了巾子新冠縮之杖
以冠二條
為一條又
召同寮信濃布一丈六尺即以一丈
令縫囊以六尺造於蓋一所調小

舍人二人囊面新又以内苑寮一所進
綿遣掌侍亦取令調被綿

已下年人从上新以十牀
为列人十二人新又以細屯綿一連

遣同取令調十四日中院新府綿

教所
二牀百九衛門府官人作丁採進杖九

五枚之狀彼府進士之後給作物取

令削繕又以子巾子冠亦給御冠師

亦令調設又可令設長櫃仲長櫃

御前座起之同袋面小舍人二人持

出取人餘膳新亦用内苑寮祿法奇

及六人与子漆褂各一領被掌已下年

人已上支子漆衾各一條示人九人各

襖子一領鬚汁一袋持物綿亦各足

絹为九女燕梳示物師一兩云
強少列ノ国御臣而已奉了高巾

子返納於所

同日夜若有男踏款前六七日於湯

前被撰定奇ノ及已下囊持以上人

行列次第
裁在番中其後於中院習礼二三度

台酒殿酒贊殿骨為催真入資兩言
時於着院人合章堂練習

前二日於中院試示內苑寮立平張
備酒饌掃尸寮立床子主殿寮奉炬
火當日大苑着木工寮立帷中院
裝束色目了我注深沓缺腋亦可
加載又諸司二分以下預此奉者着
位袍缺腋袍內苑寮并備酒饌
式穀倉院備之晚景着麴磨袍白下
龍衣者座

被綿作物取奉綿花白杖

前四五口內苑寮綿一毛紫三及

給彼取令造進

但子巾子冠自取給之苑

人尚夜歌人候右近陣

八月華門出御

赤綿底南四回補秘代立以侍子

王心依召衆上

券日座

教多券長指

內苑寮賜王心酒肴所厨子取

供御料款人於而殿西及教洞子入自

仙華門列立東庭踏奇用旋三度列

立市前言吹

進去尚綿案伴葉尚南四回立

奏祝詞

了暖在案均朱位

唯進討綿奏綃鴨吹

奏此殿曲著座

行立間掃了案當之西階南邊相去
一許大立床子為奇从从下年人已上
坐各相對南小為上仁壽殿西階西
邊立床子為管絃者座南廊小
板安東邊西面東上安疊立机為
升贊汁持囊座若諸司二分吹
同着以座日壁下北西上安疊為
殿上人侍内就案昇四支其至盤

三基立年人已上座又立八支其盤

為管絃者座其盤皆步備者饌

王心已下殿勸盃

侍長取衆

三四巡後吹

調子唱行川曲即起座列立如前

四唱後年人已上双々年進半上東

面南階内侍二人分被綿且年且

還

女花人二人拍入綿還

彈和琴者已下

男花人傳取自御簾中於庭中被
之奏我家曲退出自北廊戶向取

曉收各座如初奇及以下座給庭中
南小對面上發經者坐在榻切北上西南折壁汁
囊持座在南西上北南

陽書奇人依召各入著座給酒饌此
間奏笈法教巡了祿有美卷

天慶、年正月十四日踏奇舞兼慶
持袋丸將監仲有時以上厄近衛
木石富門ツクシトミヤト玄編着位袍皆延去十
五正十四踏奇舞取々高侍并一親
王宿一等等

國史云天平六二、癸巳朔天白皇御朱
在門覽歌恒男女二百卅五人五位以
上有風流者皆交雜其中正四位下長
由王從四位下栗栖王門了王從五位下
野中王未為及本末唱和為難波
曲倭部曲淺茅原曲廣瀨曲入裳判
曲之音令都中士女徯觀極觀而向
罷賜奉款恒男女未銀有卷

津子よこ乃院よりしるし

源氏院号以前は院ト号為只是左取

二付テ此院ト申ス

院ト云事一松云物流作者後代日

り書之義也

みりたやしをくして

私六条 京極ありて

こ乃院よりしるし

源氏ハ流石此堪能なり也

ひよりみよのむいよこの

寝後ノ東ノ對西ノ對又たり右ノ大寺

ワタトノナトノ接交ありて

あいのむの姫君

玉警

あねのひらね

明名姫君

うへにひらきなり

芸上之

朱萐流石乃高きと流たり其流をた

私以微殿ノ太后より一石河朱萐

流ニ高き一石次は流ニ高トアリお遠

ハ阿ノ以物所のあやぐあやぐこく物

ちろりし奥入ニ洋ニアリ

ふじやうこととせり少之と云

可
停行尺水驛ノ寸ハ急きと云事ハ

水原抄云ハ事ハ依勅使ヨリヤ工ル

陸地下向く時ハ每驛給程候難事

凡海路ハ驛定りたり同會ハ死ニ宜

ニ付ニ水驛ト云驛家難事ト云上

古有之見 延喜式

一説云兼テ支度シタル事ハお遠

ハくすいえと云く水路ノ驛家

不中用之候也

今葉踏奇ノ家ニ飯取水取ト云事ハ李

用

今業水じまやとい男踏奇といつて
あり事へ踏方ノ人ツ答意ナリといふ
て酒或湯漬うといふ用しと是と水状
ト云事とて簡略ナリといふ
又飯驛といふ留驛といふ門はくろひ
て廻答意ナリ候之踏方の人乃延く
とりくくといふ踏路より多しといふ此
状よりいふといふ也といふれん水より
といふのいふといふ水驛といふ
飯と食一馬といふ留驛といふ候
飯驛留驛といふカ如ク両音より用
と水じまやといふ廻答驛と用る
は飯状といふけけり又廐牧
合ニ水踏シハ舟よりいふといふ是
水驛ト云ふ今そのいふといふ
いふ

小書

義平四年五月十二九番云 踏奇
飯驛水状被定 中宮飯小宮

水今宮飯所凡土居宿所飯在大臣宿
取水右大将宿所飯 素好松屋 天皇
五年正月十四日李王此御前汁
系太后宮 兼多友 賜之饌被綿次系
康子内親王 羅幸友 設酒者如前成
明親王曰任此殿仍被綿後設管水
驛之更宿眠湯舍先被綿而枕卷
饌留款之

用

至云端奇ノ人ノ云々云々院云々

り云々云々云々云々云々水款飯
驛云々如く端奇云々云々云々
池清あり物々水驛云々云々云々
云々云々云々云々

用

此文ハ序作使より初より亦二人使
者ありつゝいありく存し款より換
すく之留款と飯驛より同物云々
人の飯と食り云々云々知りてハ馬
云々云々飼云々云々水款之人ノ世係

とやうしてふけられ下へ

あとの多入るはる志るかきひれあひ

可春季着白龍衣事老年の云々

ハ冬と白とと云たりありは但是

ハ冬候よりわくは言ふ袍より下袴

と云々之踏ノ秋の定まる汁

季ノ王記のみ

私麴麿ノ袍にて但青色ハアツ

色ト各別なり

季ノ王記踏方ノ人装束細ノ冠麴麿

ノ用腕袍白下袴着若治皆持白杖

西宮装束抄云青文ノ類麿袍白手

下袴半臂白石ノ帯深履綿花白杖

今着け言多と記取以下おとくは

と云り髪汁袋持け二人位袍

总スル由見エタリ白杖ハ年人ニテ

あはと持て舞臺ハ綿鞋とくくと

なり

あとの麴麿ノ六位の袍を以て
私安しんあんノ名搗染うすぞめ己こノ麴麿ト
云々又ハ又喜々各別ノ推おしを以て
色ノ麴麿ト云ハレハ青色ヲ以テ
毛麴麿ト云ハ定ルさだトシ中礼
玉云たまごノ名ハ麴麿ト云ハ腰あけ
のうのうのきぬハ一匹
白しろハ下したかきぬのみハ白しろハ
白しろハ一匹

言こと巾子きんすと云ハ物もの六位ろくゐ乃すなは中ちゆうニあり
麴麿こまの袍ほろハ

志しハかきぬハ白しろトと新あらた衣きハ

袂たもと束たもと抄しり云い 黄き搗うす染ぞめ 天子若シ
或係麴麿ト

青色あおいろハ 天子てんし 上皇じやうわう 親王しんわう 法皇ほふわう 皇殿わうてん 上じやう 未
若わかク 西宮さいみやう 云い 旭あす 苑ゐん 人にん 用もち 全ぜん 文ぶん 云い

或云青色ハ冬ふゆ 毛け 麴こ 麿ま 後のち 浮う 後のち 云い
作つく 輦ひん 車ぐるま 宣のたま 旨し 云い 苑ゐん 人にん 必かならず 着き 青あお 色いろ
主上しゆじやう 着き 御ご 之これ 日ひ 苑ゐん 人にん 不な 着き 云い

史了王記天慶四八廿四源五ん者明加元服
源氏將立源氏服麴麴袍結紮
或抄云麴麴青文ノ事ノ云

和云以此記見之麴麴青色七是也
此物可身變々

保元三正九二内宴云心浴忌青文関
腋之云光以中將任托共青文袍七女為

成憲青色関腋人文地下文青色

和但西宮抄三麴麴袍白下七紫下色
目分明也七變セリ

かきーのまゝハ

可踏袂ノ人以綿造花冠七額之

号七子七

殿乃中納夕考の君木ナトク内可此可不可い可との可ん可ら可

中夕考木ナトクノ君可シ可云可七可年可踏可奇

二虎中將伊弉 凡ノ款及タリ 在中
將軍親右ノ方及タリ 例ニヨリ
毎リ

りのくと明ゆくよ言やちりて

延長十二年御款云 暎及凡宮及成

冠 雪晴

竹川うらいて かの道はす

可竹河 催馬系共之

新儀式云次 志以下ニ 殿勅 孟侍臣

取難也以下 竹酒三四巡 後漸 烟未

唱竹河曲 見奥入 けふれく 此

はちちりやん のつちりやむのよ

二 殿 ちりやん のつちりやむのよ

いさあやめ ちりやん のつちりやむのよ

とふ舞ノ邊に ちりやん のつちりやむのよ

もとも ちりやん のつちりやむのよ

引ふ 款之

引ふ 款之

舞のまゝ事くさか
心るまゝ
か
く
し

都ハ忍リさカさシ

東坡十一 李伯時陽回圖

龍眠社識 懸 懸 処 昼 出 陽 回 章

外 声

あらま

おいるまゝゝゝゝ

多キ心シ

少カいカゝゝゝゝ世シ子シれゝゝゝ

可ハ高ハ中ハ子ハ懈ハ冠ハ 昭ハ欽ハ式ハ 新ハ儀ハ式ハ

高ハ中ハ 自ハ不ハ給ハ 正月十四日

中ハ西ハ宮ハ抄ハ三ハ子ハ御ハ中ハ子ハ造ハ作ハ奉ハ子ハ巾ハ子ハ

二ハ口ハ又ハ石ハ内ハ苑ハ察ハ作ハ可ハ奉ハ子ハ巾ハ子ハ新ハ冠ハ絹ハ

之ハ林ハ上ハ白ハ一ハ系ハ 又ハ以ハ高ハ中ハ子ハ冠ハ給ハ御ハ冠ハ師ハ

木令調設事畢言中子返御所但言
中子ノ冠ハ自取給之曰袂束抄云言中
子之六位以綿裏面之今果言中子
冠ハ中子ツメヤクニ冠白キ又ニテ是ツハル
龍人取ヨリ是ツクク給六位ノ年人ノ内
是ツ息ス言中子キル物ハ綿ノ面ツヤウフニ
ヨシ見タリ帝ニ見別々染ナレニヨテ世ハ
上タレトハ一リ行別ニシルス事アリ

苑別勅ニアリ狂言ヤカニシキ物ニキスル人

狂言烏帽子ナト云々

ヨシと云々

朱小書
別勅別儀ナシ

こと々々

可右ノあり

中西宮抄云踏方之立御所養壽詞

おこめさるる

まのころき

可右ニ詳ク

踏歌綿事

續日本紀曰天平二年春正月丙戌
朔辛丑天皇御大安殿宴五位以上
晚以移幸皇宮百官主曲以上陪從
踏歌且奏且行引入交裏以賜酒
食因令探蛙籍書以仁義礼智信
五字隨其字而賜物後仁者絕義
者懸之礼者綿之智者布之信者
以常布之今綿ヲ賜ハ礼ノ心
心之以上可

中よりけ綿ハ内苑寮より是と有り
内侍苑人亦在階乃上ニ運ニ入テ持
向ハ人款以以下舞童已上双ニ舞
又、三ノ階ヲノホリテハ切の縁を
浴小ホリり琴ひきこ下此切の綿ハ
六位苑人簾中より丸をこして中
庭中ホリて是と有り是よ
り之は又机ニ綿ヲ積ニ置ら

と袋七千すくみよりして一十百子可
トカソ一ニ袋入ニ二十ニ中又カト云
款シうさひてまらつる見えらる今ノ世
ニ絶て久しき事ナシハ毎一ノ物
事ハ志まらるる事ニ新儀式西宮延
表ノ御詔トニ載ラシタレ事大ニ志
アリ一物ヲ事ナク是ホハ内裏ノ儀式
也物終ニ一ハハ六葉院ノ事ナレハ
祿の端ニ内苑案ナリナハ事
ハ多ク一ハ各本一取ニまらるる事
多ク一

奇少將ノおさくかろくさ出る

紅梅の右左長ノ新ノ人ノリノ音
とわりそのまじ
素然私云く中ねの都ハ辨少物
よあさくかろくさ出るとして各事
物ハ物ハ奇少梅ハ紅梅右左長
卷ノ一童あれたる事ニ時

より却てさし進んでゆくことさしむれば
しおろしぬまのゆつろくは法の約中
わりの考へはゆかぬと考へる

可秋藤安人

在系人又石見

私勅云卿補任從四位下士師

元中辛酉清少將延暦廿四年正月十

七日任参議中辛酉初行也元

いふ一此人

延表天曆下時代とやらんとて云く

るり

上古乃人の徳に賢人をもし共アル方ハ
又ウクし若人をもあてし今時の人の
かゝる振ノ事ラスクシテ器用ナレトク
考フホメ給ク

中將ろくろは

夕暮く

素然 私は河前ノ中將も夕暮とい
つるん

まぐくー身大包けん

天下補依ノ道政は有職乃方との
ふせや切やうの遊れくねくとし
んけんをーしをひーし
ろくろろろろろ

源氏の政は学文をーはうくや
ろ遊れ方をものこまのまーか
と夕暮のまやーはろをーし
ーし

ろくろろろろろ

真一 身大包けん
夕暮の下まのまやーはま
あつひまのま
ろくろろろろろ

人の言儀よりあてしけぬ物も
花実とおもひそめて

いとうほしとおひあり

中流氏君の由じすこの中ねと
ふふむ

えんまらんらくはらうすまひまのうらひて

万春樂 踏奇曲 催馬楽

多氏くお石傳へ

らんすんらく一版人わうえんらう

わくえんらん二版くあんせいくあう

らんらうらうまの二版

踏歌ノ奇ニ我家は殿万春楽行はけ

四曲シウタフ各呂く

我皇延祚億仙齡 万春楽

元正慶序年光霽

延曆佳期帝化昌

百辟陪筵華帷内天人感

千般作樂紫震瑞

夕露沾西陽 休德

日暖春天作載陽

願以喜辰常奉天

子之億載奉明主 百春奉

事吹之新元章示淡海三和撰

中西宮抄云瑞奇日舞人起座唱 百春

我皇延祚億仙齡 百春奉

元正慶序年光廉

催馬示淡海三和撰之
多氏在傳

私云今ノ經云今ノ中ニ
多氏ノ外石傳(十九)

今葉百春示ハすてハ勺ノ待人シラ

漢音ニウタヒテ勺コトノアハヒニ百春奉と

唱ル之瑞奇ノ舞人ノ立サニ云奉十

ルシ源氏君くらりすまひの終少之志ん

らく二句とつきつけたり

延喜踏歌圖

奇頭
 奇頭
 奇頭
 奇頭
 奇頭
 奇掌
 奇掌
 奇掌
 奇掌
 奇掌

舞臺八人ノ列

東階 後持 踏掌 和琴 踏掌

舞臺七人ト下ノ十二人ヲハ列人トモ云人ノ中九人ノ人ノ

新羅 琵琶 人
 新羅 琵琶 人

横笛 百文

算盤 笙

銅拍子 厨汁 朱下 位袍

振桿 袋持 日

位袍トク、ツ子ノ例袍ノ云々五位ハ五位ノ袍 四位ハ四位ノ袍ト其位ノツ子スル云々

玉云花鳥

人々

御覧しつゝうらさうらみわき書て又
うにこころさよつひはゆへにほめてや
ありお遠の程よこころえぬり程と
此共次りしつゝあふらふ
まことめこころあはれしつゝのまひ
可踏奇後宴ら結く

延嘉七年二月廿二日御礼曰踏掌可奉
仕踏奇後宴

御射場中務親王左大臣已下侍吏
台殿上云々未預百立書列如例御賭
物占下賜

一 踏奇後宴 松西宮云 二三月間 宿取未

御出 也居 登云譯 出后依伴台王御 或石水 殿上 王

御取ら矢着壬御皆起 口一人不立 可了献物

也神仙門侍臣共取献物入自月苑門

列立射場 西上水面上卿七献物

同云何物一人唯云踏掌取進仰贊折

名稱者 稱名了上卿去給膳部二貫

首唯退台膳部二内膳正唯卒膳了

受一人相迎教歩了了授當右仗在

授以下進膳所 取掌取筒石計王以下

取弓矢進 月華門列入判ウラニリ 戈叩ホコラ

鉦者前行當披樹下屏幔西邊立留

右進六位友人任支日石川射平

射平亦著座

絶御前又

雜色二人

一人召射

平者一人執

出納一人令持中二脚

一脚置畏錢花葛幔等一脚置酒槽也並以御鏡小舍人昇立立權書殿至座小四五間其後發置為主以下座其前發日瓦為射平未著座

入假披樹下幔西邊使姬歌相後内苑養

給王心侍長給一瓦酒饌出后右將監

二唯作云懸的唯懸止的矢申的矢内

立立著

立板樹下還云天皇射注二度間以中的為限多上小舍人取仰矢此間暫令者

使姬歌中中給持王心同起進就以下

臣

自棚前 勢渡着 安福東廂一人取梓

一人取筒取梓立棚西邊執筒者自
班西慢西邊水上筒將令却叟姬欣
木中鵠持王心間起進就以下取花幣
猷之蹈掌取豫立脚花幣札賭物
壹於沛座南沛海橋上若無沛射
不猷或猷之

次將依作懸晉親王的一取掌筒着的
付座一今台親王射了
每日取常 左射
殿少邊射 一度
前經射庭面就緣取
晉的公卿已下射隨

中否領行梓以充掌錢有沛厨子取供
菓子于物木脚酒射了雜色出納合
昇中取叟姬欣退出如彖時依作分
前後令射先取掌持筭硯於上卿云
分交數易物
隨作定沛流了一今台之各唯念人
不猴
蹈掌取猷懸縑射合以衣一裝在宮女脚
送反一別當同取
依日猷
懸物的付着侍次射了勝方再
拜列立庭中水面西上
重行但勝負依負若中科者依
作給懸物無中科者令射一度有中

二三月より此結と事ありとれ
比ノ私して女樂と後宮よりす
とてい女系乃事うそ人の如く
りりありま竹川春んてり前乃
初はゆここの人如りありあ
こ又その内のりとりけえ
踏歌の後宮と換して深坊より
あり
御あともれり家りまあらりも

しそ

丁 菱結ノ忌皆袋ノ納本儀

琵琶袋

西錦或希色浮線結
裏唐後

箏袋錦 二幅

和琴袋

如箏

笙笛袋 太座同前

此巴木ひさし物の中に入る也
ト云時ハ笙箏葉も笛此中よこも

永華内府の雜抄より

のめとせむる

可秘置く 朱中書 秘藏く

ゆりつふと

ゆりつふと

用

は女系ノ事、花鳥云女系多ク用意
ありされども、何れも一りりしてそ
事ありともみへ治ト云、然と竹
河巻ニ意中物冷泉院の所物治の

次ニは女系ノ事 所集に入

よりある上の事とみへるは
物治の事といふと、出世は別と事
ありと心得入る

私云、ゆりつふと此並ニ九巻月次につふ
く、と明き事あり、徳抄よりある
よりゆりつふと二月の事、漏脱不實よ
似たり、葉々、踏奇の後、必二月
三月の事、二名約く、西宮亦詳く

御くはは私に後宮二月はあつり
とゆゆつみれ二月の事と念ませ
多う花んあわつとふされんは巻の
次よやよいの春日あまりと教瑞り
のせうり下付眼也

追勅竹川ノ巻は此事とふよ好六
系院の多うりのあつたに女らん
てあまひせし進けつりたり
りりまると右のおつたかうまう

とと御名瑞奇の聖朝十八日よ
則如系何りとみさうり
竹川巻と抄する次託る





